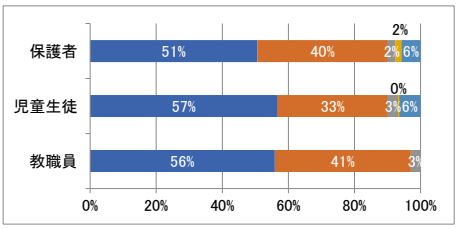
令和６年度　学　校　評　価

そう思う　どちらかといえば、そう思う　どちらかといえば、そう思わない　そう思わない　わからない

（１）主体的に考え行動する力を育む教育の推進

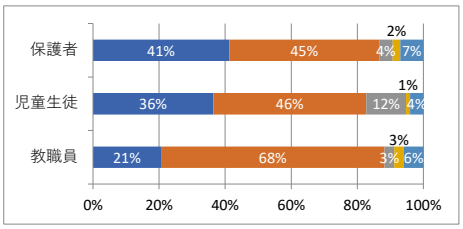
１豊かな心と健やかな体を育む教育の推進

学校は、豊かな心と健やかな体を育む教育の充実に努めていると思いますか。（感動・感謝、郷土愛、いのちを大切にする心、こどもの体力向上、基本的な生活習慣など）



２自ら学びに向かう力を育む教育の推進

学校は、こどもが自分で考え、自分から取り組む授業づくりに取り組んでいると思いますか。



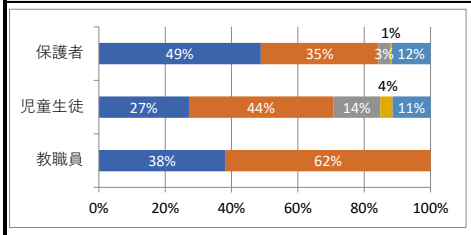
考察

1に関しては昨年度まで「豊かな人間性をはぐくむ心の充実に努めているか」という問いであった。多少質問がは異なるが、肯定回答は保護者が３％増(そう思う１７％増)、教職員は同じ、児童は昨年は質問項目になかった。２の項目は今年度からの質問項目。肯定回答は保護者86%、児童82%、教職員89%と、教職員が最も高いが、「そう思う」の割合は保護者の半分程度である。

（１）主体的に考え行動する力を育む教育の推進

３社会の形成や持続的発展に主体的に貢献する力を育む教育の推進

学校は、学校生活や地域社会をよりよくするために考えたり、行動したりするこどもの育成に、取り組んでいると思いますか。（児童会・生徒会活動、学校のきまり見直し、地域のよさを伝えたり課題解決したりする取組、ナイストライ（中学校）など）

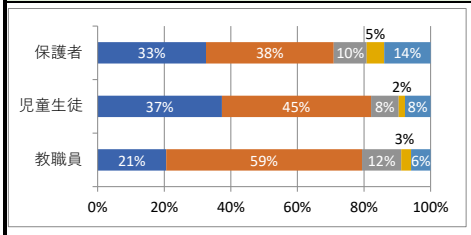


今年度からの項目。肯定回答は教職員100%であるが、児童は81%で、かなり開きがある。５・６年生に関しては委員会活動を通して学校のために働いているという意識はあるが、３・４年生の段階では意識はまだ低いようである。校則見直しの話し合いが、アンケート後であったことたことも影響があると考える。総合的な学習で地域の方を招いての学習も増えており、地域のよさを学んでいるが、子どもたちの実感につながっていないところがある。

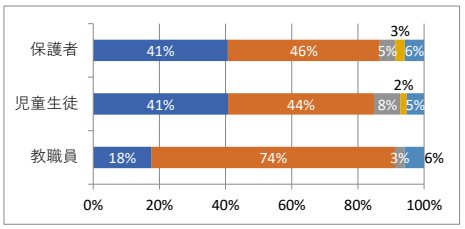
（２）こども一人一人を尊重した教育の推進

４５個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

学校は、こどもが、学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学ぶ授業づくりを行っていると思いますか。



学校は、こどもが、対話などを通して、他の人の考えや意見を自分の学びに生かすような授業ができていると思いますか。

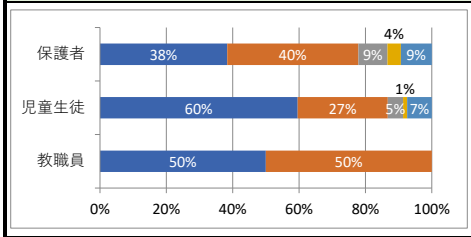


この二つも新項目。どちらも教職員の肯定回答の割合が高いが、「そう思う」のみに着目すると、極端に低い。特に「対話」に関しては、保護者や児童の半分以下であった。教職員は子どもたちが主体的にが学習する授業づくりにおいて、取り組んではいるが十分に満足していないいことが「どちらかといえばそう思う」となっていると考える。

（２）こども一人一人を尊重した教育の推進

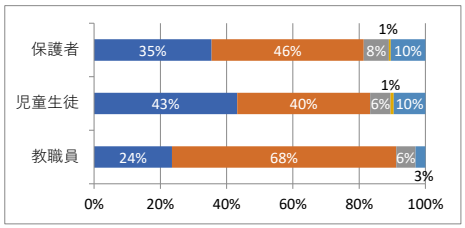
６特別支援教育をはじめとする多様な教育的ニーズに対応した支援の充実

学校には、こどもが助けを必要とするときに、先生や友達から支えてもらえる温かな雰囲気があると思いますか。



７インクルーシブ教育の推進

学校では、こどもがそれぞれの違いを認め、お互いを尊重し合って共に学び合っていると思いますか。

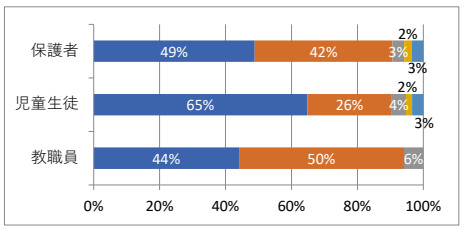


６、７とも昨年と問い方が異なっており、全く同じと考えることはできないが、６について、保護者の肯定回答はは５％増、教職員の肯定回答はほぼ同じであった。昨年は、児童にこの項目はなかった。７に関しても保護者の肯定回答は昨年より１２％増、児童は６％減、教職員２％減であった。どちらも保護者の肯定回答がアップしている。

（３）最適な教育環境の整備

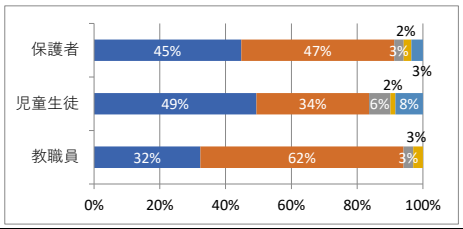
８安全・安心な園づくりの推進

学校は、こどもの安全を守る環境の整備を進めるとともに、安全教育（生活・交通・防災など）に取り組んでいると思いますか。



９地域や家庭と連携した教育環境の整備

学校は、地域や家庭の人と協力して、授業や行事などの教育活動を進めていると思いますか。

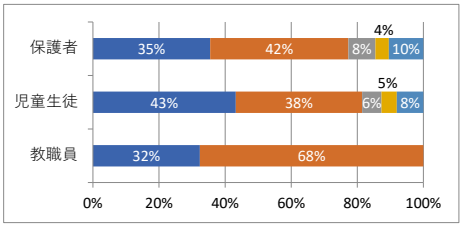


8の「安全教育」に関しては、肯定回答が保護者３％増、児童は同じで91%、教職員は３％減で94%であった。特に保護者の「そう思う」は16%増えており、学校の安全教育が学校・学級便り等で伝わってきたのではないかと思う。9の「地域や家庭との連携」では、肯定回答が保護者11%増、教職員は同じであった。児童は昨年まで質問項目なし。

（４）こどものいのちと権利の擁護

10 こどもの最善の利益を守る環境づくり

学校は、こどもの意見を反映させ、こどもの権利を守るとともに、こどもや保護者が相談しやすい学校づくりに取り組んでいると思いますか。

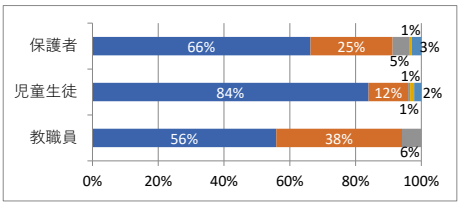


教職員の肯定回答は100％であるが、保護者は77％、児童が81％と、教職員とはかなり開がある。学校への相談に関しては、担任から教育相談を呼びかけたり、カウンセリングの希望調査を行ったりしているが、日常的な事に関する相談しやすい環境をつくっていく必要があると考える。

（５）学校独自項目

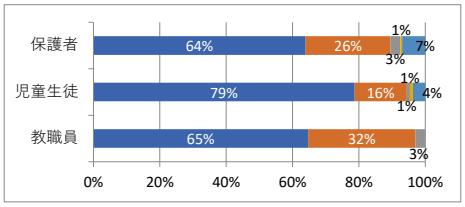
11　学校独自１

学校は「あいさつ」に力を入れていると思いますか。



12　学校独自２

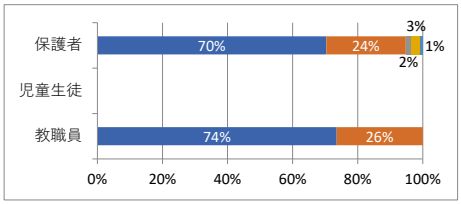
学校は、互いを認め合う「いいね」ありがとう」があふれるような取組に力を入れていると思いますか。



11のあいさつに関しては、肯定回答が保護者８％増、児童４％増、教職員3％増で、あいさつの向上が見られる。地域の方からもあいさつに関してプラスの声をいただいている。12の認め合いの取組に関しては、肯定回答が保護者11％増、児童6％増、教職員同じという結果であった。7の項目と重なる部分はあるが、わかりやすい目標の取組が保護者に伝わってきたと考える。

13　学校独自３

学校は、学校メール(すぐーる)、学級(学年)便りなどで、情報提供に努めていると思いますか。



学校からの情報提供に関しては、保護者の肯定回答は94％で、昨年より１％減で昨年とほぼ変わらなかった。教職員の肯定回答は100％だが、「そう思う」が昨年と比較して22％増であった。教職員の情報提供への意識の高まりとその実践が、6,７,９,11,12の肯定回答の大幅アップにつながっているのではないかと考える。

来　年　度　の　具　体　的　な　取　組　に　つ　い　て

○「自分も友達も大切な存在なんだ」と児童が実感できる取組を行っていく。児童同士が「いいね」「ありがとう」を自然と伝え合えるよう、児童のコミュニケーション能力を高めていく。そのためには、定期的に児童同士が対話をする時間を設定し、互いを知る互いを受け入れる機会を設ける。また、教師が率先して児童に「いいね」「ありがとう」を伝える。

○校内研修を充実させ、教職員の授業力向上を図る。熊本市学力調査の結果を分析し、本校の児童の実態に合った取組を行う。従来の学習の仕方のみにとらわれず、児童が主体的に学ぶことができるように、効果的なICTの活用や既習事項の定着を図る方法等を校内で情報共有し、授業づくりの改善につなげる。

○コロナ禍では、学びも遊びも生活すべてにおいて制限がかけられ、児童の経験が不足している。自分たちの学級、学校、地域を「こうしたい！」と思えるような取組を行っていく。低学年、中学年でも実感がもてるように学級会等を通して、児童が発案し、話し合い、実践することで、児童の経験値を高める。

○けがで保健室に行く児童が年々多くなっているが、中庭の隅や廊下、教室等でけがをする児童が多い。本校の実態を踏まえた安全教育を行う。また、SNSとの正しい関わり方を発達段階に合わせ、計画的に行う（今年度は学校保健委員会で実施）必要がある。

○昨年度より、保護者や地域の方に参加してもらう行事が復活し、交流する機会が増えた。２年目の今年度は、同じ行事でも児童や保護者の参加数が大幅に増加した。校内ポスター掲示の効果が大きい。次年度もPTA、地域と協力して「子どもが行きたい」という思いをもてるような発信を行う。一方、保護者の授業参観への参加は多いが、学級懇談会への参加は極端に低い。保護者が参加したいと思える懇談会の内容の工夫、発信の工夫を行う。

○担任への相談だけでなく、カウンセリング、心サポート相談員、SSWなど、学校の相談体制を毎学期保護者に発信する。担任、学校職員以外にも相談できることをわかりやすく知らせる。

○学校独自の取組である「あいさつ」の指導と「いいね」「ありがとう」の取組についての評価が高まっている。今後もあいさつをはじめとして、教職員は児童の実践の評価をその場で行い、意欲につなげていく。また、情報共有の評価も高まっている。学級、学校便り等を通して、児童の活動の様子を保護者に発信し、保護者や地域の方に伝えていくことで、児童のさらなる意欲につなげていきたい。

小　中　学　校　関　係　者　評　価

○２の自ら学びに向かう力をはぐくむ教育では、児童が自ら選んで学習する(国：低学年）、自分に合ったコースを選んで復習に取り組む(算：中学年）、単元に応じて課題や学習方法を自分で選択肢、課題解決していく自由進度学習(理・社：高学年）で取り組んだ。個人差が出てしまうが、対話を通して学びを共有する回数を重ね、個人差を埋めていきたい。

○３の項目は児童の肯定回答の割合が低い。児童主体で「何をするのか考える機会」が必要だと思う。

○どの学年も積極的に対話を取り入れたペア学習やグループ学習による意見交換、グループによる新聞づくり等の共働学習に取り組んだ。コロナ禍ではなかなか対話、グループ学習ができず、経験不足な部分がある。学年の発達段階に応じて、系統的に学んでいく必要がある。

○学級会を中心とした特別活動に取り組んだ。意見

○体育の時間の事故やケガがあった。場づくり、準備運動、約束事の確認等をしっかり行っていく。特に特別支援学級においては、複数教員の配置(どの場所に必要か）、安全な場づくりをしっかり行っていく。

○学校目標「あいさつ」と「ありがとう」は、児童の意識が高まり、よく聞かれるようになった。まだ個人差はあるので、継続した取組が必要である。

○学級通信や学年通信、学期ごとの懇談会で学校の取組や思いを伝えてきたが、一方的なものになっていないか、課題がある。保護者ともっと連携できるような機会づくりを模索していきたい。